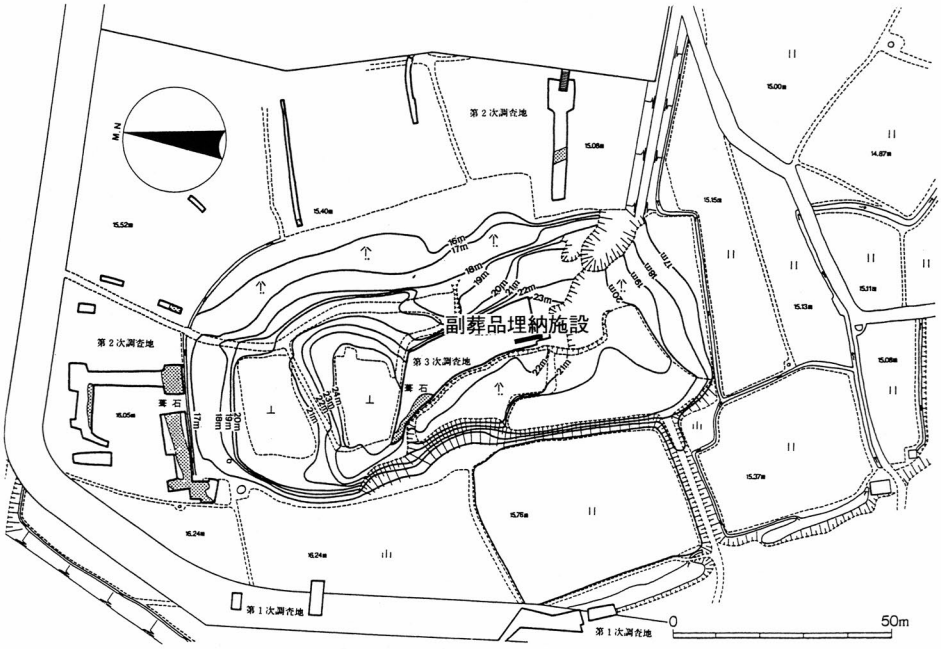
# 恵解山古墳の鉄器埋納施設について

久保哲正

## 1．はじめに

長岡京市勝龍寺に所在する恵解山古墳は、全長約120mという、長岡京市はもとより乙訓地域の中でも最大の規模を誇る古墳時代中期の前方後円墳である。この乙訓地域は、古墳の集中地帯として知られ、特に、前期古墳については、学史的にも著名な大型の前方後円・後方墳が群集する地域である。しかし、中期の大型墳は本墳のほかに今里車塚古墳が知られる程度で意外に少ない。

この古墳の築造された地点は、乙訓地域でも最南部に位置し、桂川・宇治川・木津川の三川が合流して淀川となって大阪平野に流れ込む山城盆地の口の部分にあたっている。その地点は、桂川の支流である小畑川左岸の沖積地で標高約17mという、京都府内でも最も低位置に築かれた前方後円墳である。こうした点で、古くから乙訓地方のみならず、山城




第１図　恵解山古墳墳丘測量図(注３ｂ文献より転載)

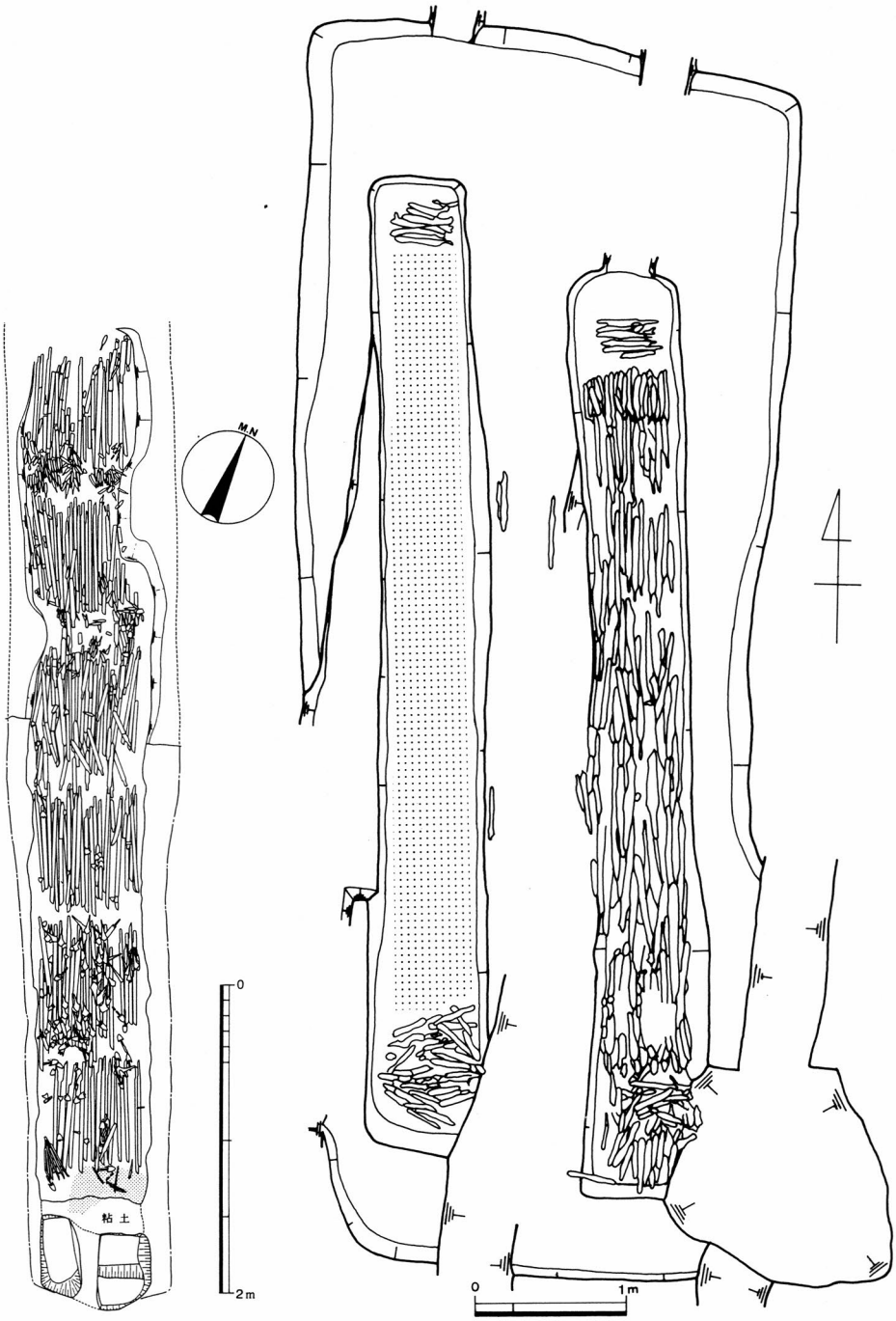
地域全体の古墳時代を復原する上から注目されてきた。しかし、後円部の墳頂全体が墓地となっていたり、その他も竹林として利用されてきたこともあって、後円部に埋葬主体となる竪穴式石室の存在が推定される(注1)ものの、過去の調査は墳丘裾や周濠部の確認調査(注2)が主で墳頂部に及ぶことがなかったため、内容について不明な部分の多い古墳でもあった。

恵解山古墳の墳丘規模等については、現状で全長約120ｍ・後円部径60ｍ・高さ８ｍ・前方部幅55ｍ・高さ6.5ｍを測る。墳丘全体については、後世の墓地造成や竹林耕作等によって原形はかなり損なわれているが、三段築成で埴輪・葺石を有し、墳丘周囲には幅約30ｍの盾形周濠が取り囲み、大阪府堺市大山(仁徳天皇陵)古墳と相似形をなす後円部直径と前方部長が等しい墳丘形態と推定されている。出土した埴輪等から、この古墳の築造年代としては、古墳時代中期、５世紀前半から中葉という時期が想定されている。

1980年４月に前方部中央から出土した大量の鉄器は、乙訓地域における古墳時代の変遷の中で大きな意味を持つこととなり、この古墳を再認識する上で貴重な資料となった(注3)。都出比呂志氏は、この恵解山古墳の被葬者をめぐる位置付けについて、乙訓地域における古墳時代前期までの中枢であった向日グループに対して、河内大王家と手を結んだ乙訓南部地域の長岡グループにおける新たな首長の登場という想定をされている(注4)。本稿では、恵解山古墳出土の大量の鉄器とともに、それらの鉄器を納めていた施設を対象に若干の検討を加え、改めてこの古墳の持つ意義について考えたい。

## ２．恵解山古墳の鉄器埋納施設の構造について

恵解山古墳の鉄器埋納施設については、竹林の養生土の入れ替えによる削平によって、遺構の直上までが攪乱されていたため、埋納施設の上部構造を推測することが困難な状況であった。また、埋納施設の北端部については、大量の鉄器が検出される契機となった墓地造成に伴う工事によって削平を受けており、不明である。こうした状況下で検出された遺構は、鉄器を納めた本体施設のみで、本来、これを納めたと想像される土坑については確認できなかった。ただ、幸いなことに埋納されていた鉄器についてはほぼ完存していた。この施設の法量概要としては、長さ約6.5ｍ・幅約0.9ｍ・現存深さ0.2ｍであり、かなり狭長な木製容器が想像される。容器の構造としては、底面が少しＵ字状を呈する底板を置き、長側辺については、立上がりの低い側板を組み立て、隙間に粘土質の土を充填したものと思える。短側辺については、南端のみが遺存していたが、幅15cm程の粘土帯が確認された。この粘土帯そのものが短側辺の小口を形成するものか、小口板を支えるための充填用粘土であるのかという点については、確証が得られていない。ただ、この粘土帯上面では赤色顔料が撒かれたような状況で検出されていることから、元来のこの組合式の木箱のような




(左)恵解山古墳副葬品埋納施設実測図
(注３ｂ文献より転載)
網部は赤色顔料を示す

(右)西墓山古墳鉄器埋納施設略測図
(注５ｃ文献より転載)
網部は農工具出土部を示す

第２図　鉄器埋納施設実測図

容器そのものの高さは、調査時点の検出深度を大きくうわまわるような規模のものでなかったと想像される。

この容器の中に仕切りはなかったが、大きくは６つのブロックに分けられて鉄刀や鉄剣が置かれ、その上面に鉄鏃や刀子・短剣(槍先)等が整然と配置されていた。鉄器は、総数約920点で、その内、鉄刀・鉄剣が約190点、鉄鏃570点、短剣140点他という多量なものであった。

この容器に見られる遺物の出土状況は以上のようなものであり、遺骸を納めた埋葬主体とは考え難く、副葬品のみを埋置するための施設と思われる。こうした副葬品のみを多量に埋納する施設は、これまでの調査では乙訓地域はもとより京都府内を眺めても事例がなかった。ただし、大量の鉄器を埋納する中期古墳の存在については、大阪府の古市・百舌鳥古墳群を中心にいくつかが知られており、恵解山古墳例についてもそれらとの比較で検討されてきたが、その収納方法や容器の形態となると類例として比較しにくいものが多く、鉄器が大量に出土した古墳の諸例といった形でしか並べられなかった。そうした中で、1988年に大阪府藤井寺市青山で検出された西墓山古墳の埋納施設の状況は、恵解山古墳の施設を検討する上で極めて示唆的な様相を示すものであった。(注5)

藤井寺市西墓山古墳は、古市古墳群を形成する大古墳のひとつである墓山古墳(墳丘全長225ｍの前方後円墳)の前方部周濠西側外方において、新たに確認された陪塚と考えられる一辺約20ｍの方墳である。この古墳の墳頂部において、計２基の鉄器埋納施設が確認された。２基は、同一の巨大な土坑(南北約7.8ｍ・東西約3.2ｍ・深さ0.2～0.3ｍの隅丸長方形)内に、ほぼ南北に並列して置かれており、東側施設の長さは5.9ｍ、幅は北端で約0.7ｍ、南端で約0.8ｍの規模で、西側施設は、長さ約6.2ｍ、幅幅北端で約0.6ｍ、南端で約0.8ｍの規模となる。両側の施設とも、恵解山古墳例と同様に、底板と側板の組み合わせによる木箱が想定されている。東側施設には、刀・剣・短剣・槍先等の武器類約230点が大きく７群に分けられて埋納されていた。もう一方の西側施設には、南北端に短剣がまとめておかれ、中央部に数千点に及ぶと推定される鎌や鋤先・斧・鑿・刀子・鉋といった農工具類が隙間なく敷き詰められていた。また、西側施設からは、これら鉄製品以外に滑石製模造品として曲刃鎌と斧が計８点出土している。この西墓山古墳の築造年代としては、出土埴輪や鉄器等の特徴から５世紀中葉が想定されている。

この西墓山古墳例についても、墳頂上面は、若干、削平されている可能性は強いが、少なくとも埋納施設を納める土坑の掘形が遺存している点から、埋納施設となる木箱の高さは低かったことが推定される。この点では、恵解山古墳の埋納施設の形態を復原的に見た結果を裏付けるものと思われる。この両古墳の埋納施設に見られる共通点としては、非常

に狭長な組合式の木棺に似た形状を示すものの、その高さは約0.2mという低いものであり、遺体を安置するための棺とは考え難く、副葬品を埋納するために作られた容器と思われるところである。また、容器の法量も近似した数値を示し、鉄製品のうち、鉄刀や剣等の武器類の配列状況もよく似た方法で埋置されている。しかし、恵解山古墳例が、前方後円古墳としても中規模クラスの古墳で、同一墳丘上に営まれた埋納専用施設であるのに対し、西墓山古墳例は、墓山古墳という巨大古墳の陪塚として築造され、その墳頂に鉄器だけを埋納する施設として営まれるというものであり、それぞれの古墳被葬者における絶対的な力の差は両古墳における大きな相違点と言えよう。

### 3．鉄製品埋納施設の諸例

古墳時代中期において、鉄製品を大量に古墳に埋納する、それも埋葬主体部ではなく、別の施設を設けて、そこに副葬するという例は、先にも述べたように大阪府の古市・百舌鳥古墳群を中心とする、いわゆる河内大王家を構成する古墳群の周辺で比較的多数が確認されている。

2、3例をあげるなら、藤井寺市アリ山古墳(注6)は、誉田山(応神陵)古墳の陪塚である可能性が指摘される一辺45m・高さ4.6mの方墳で、2基の主体部が確認された。いずれも、木棺もしくは木箱が外表施設を伴わない直葬の形で埋置されていた。その内、墳頂中央部に位置する1基については埋葬主体の可能性が残されているが、もう1基は長さ約3m・幅約1.4m・深さ約0.4mの木箱と推定されるもので、内部にはおおむね3層に重なって多量の鉄製武器や農工具が、箱いっぱいに埋納されており、鉄器だけを副葬する施設であったと考えられる。出土鉄器は、鉄刀77点・鉄剣8点・鉄鏃1542点・鉄鎌201点・鉄斧134点・蕨手刀子151点他で、計2700点にもおよぶ多量なもので、鉄器以外には土製丸玉11点があった。

藤井寺市野中古墳(注7)は、西墓山古墳と同様に墓山古墳の陪塚と推定される古墳で、一辺が約28m・高さ約4mで周囲に周濠を有する2段築成の方墳である。墳頂部では、大きく5群に分けられる鉄製品の出土が確認された。数度に及ぶ攪乱のため、埋納施設の形状をはっきりと検出することはできなかったが、いずれも、直葬された容器の短側辺角に近いと推定される地点から鉄釘が出土していることから、釘で固定された組合式の木箱であったと想定されている。この内の1基については、埋葬主体部であった可能性が指摘されるが、他は遺体を伴わない埋納施設であったと推定される。野中古墳の出土鉄器を特徴付けるものとして多量の甲冑があるが、最も多く埋納されていた施設は長さ約4m・幅約0.5m・高さ約0.5mほどの狭長な木箱の中に短甲と冑が10セット、鉄刀が11本、隙間なく納められて

いたと想像される。これ以外の埋納施設についても、その規模については不確定であるが、例えば、鉄鋌や鍬・鋤・錐といった農工具を主に納めた施設は、おおよそ長さ1.5m・幅1mほどの大きさと復原され、埋納する鉄器によってその形状を整えた組合式の木箱であったことが推測される。

上記が、いわゆる陪塚という形で主墳に付属する古墳という典型的な別区画をもった埋納施設の例とすると、同一墳丘上に別施設を設ける古墳の例としては、大阪府南河内郡美原町の黒姫山古墳がある(注8)。黒姫山古墳は、全長114mで周囲に盾形周濠を有する5世紀中葉の前方後円墳である。この古墳では、後円部墳頂に存在した刳抜式石棺を納めた埋葬主体部とは別に、墳丘主軸線上の前方部頂からくびれ部までの中間部に竪穴式石室が設けられていた。河原石で組み上げられた竪穴式石室の規模は、内法で長さ4.03m・西端幅0.83m・東端幅0.75mという、収納する鉄器の数量・形状に合わせたような狭長なもので、内部には隙間も無い程に甲冑を中心とする武具・武器が収納されていた。その数は、短甲24点・冑24点・刀剣類24点・鉾9点・鉄鏃56点・刀子5点という多量なものであった。この黒姫山古墳例は、墳丘規模や埋納施設の設置場所等では恵解山古墳に近い姿が想像されるものである。この他、堺市百舌鳥大塚山古墳があげられる(注9)。墳丘が完全に破壊・削平されたため全容が判然としないが、周濠を有する全長約163mの前方後円墳であり、後円部で4基、前方部で4基の計8基の主体部が緊急調査によって確認されたが、このうち、埋葬を伴う主体部は後円部・前方部とも1基づつで、ほかは、簡易な粘土槨に覆われた木棺の形態をとった副葬品の埋納専用施設であったと推定されている。多量の鉄器を埋納していたものとして、後円部の4号施設からは、2群に置かれた100点余りの刀剣や6群に分置された多量の鉄鏃、鉄矛1点といった武器類のほか多量の農工具が、前方部の5号施設からは、鉄矛17点・鉄刀5点・鉄剣86点という武器類が、それぞれ出土している。

このように古墳時代中期における多量の鉄製品埋納施設を持つ古墳はいくつか知られているが、その大半は、やはり、河内平野に展開する古市・百舌鳥古墳群という大古墳群に含まれるものである。ただ、古墳時代前期以来の大王墓が所在する大和においても、奈良市のウワナベ古墳の陪塚とされる大和6号墳(注10)においては、簡易な粘土槨と思える施設から大小の鉄鋌872点をはじめとして、鉄鏃、鉄斧・鉄鎌・鍬・刀子等の農工具類や石製農工具が多数出土しており、今後ともその出土事例が予想される地域として注意が必要になるものと思われる。

ところで、こうした鉄製品を埋葬主体とは別に施設を設けて埋納するという副葬のありかたは、古墳時代前期からみられるもので、大規模なものとしては奈良県桜井市メスリ山古墳例(注11)がよく知られている。埋葬主体部である後円部墳頂の竪穴式石室に並列して設けら

れた副室としての竪穴式石室からは、多数の碧玉製石製品とともに鉄刀１点・鉄剣１点・槍先212点以上・銅鏃236点・鉄弓１点・鉄製矢５点・石製鏃50点等の武器類、鉄斧14点、鉇51点、刀子45点以上、手鎌19点、鋸１等の工具類が出土している。また、奈良県橿原市新沢500号墳(注12)でも、後円部墳頂中央に設けられた埋葬用の粘土槨に沿って、長さ約6.5ｍ以上点・幅0.5ｍ・深さ約0.2ｍの箱形容器と推定される副槨が直葬して設けられ、三角縁神獣鏡１面をはじめとする銅鏡計５面や八ツ手葉形銅製品と呼称する特殊な懸垂鏡１面・筒形銅器５点・銅釧１点のほか、鉄刀・鉄剣・銅鏃・短甲・鉄斧・鉄鎌等々の多数の武器・武具・農工具類、車輪石・石釧・石製坩といった石製品が出土している。

各地の前期古墳の中には、埋葬主体部となる石室等に付設した形で、副葬品を納めるための施設を設けたものが見受けられるが、埋葬用とははっきり区別した施設を営んで、そこに多量の鉄製品を中心とする副葬品を埋納するという形態は、上記の２例にも見られるように、やはり大和を中心とする古墳群の中に収まるようである。

一方、京都府内に目を転じた場合、現在までのところ、鉄器を多量に埋納する施設を有する中期古墳の例は恵解山古墳以外には知られていない。さて、恵解山古墳の所在する位置については、最初にも説明したように桂川・宇治川・木津川という三川が合流して淀川となって大阪平野に流れ込む、山城盆地の出口に当る。その三川の水系に属する各地における前期古墳からの副葬品埋納施設について、少し見ておきたい。

向日市妙見山古墳(注13)は、全長約114ｍ・後円部径約69ｍ・高さ約８ｍ・前方部幅約58ｍ・高さ約５ｍの規模を有した４世紀後半代の前方後円墳である。現在は、土取り工事のため消滅してしまっているが、後円部に営まれた竪穴式石室は特殊な形態で、組合式石棺のまわりに円礫や割石を積み上げて石室を築き、その両短辺の外側に副葬品収納用の副室を作り付けている。一方の副室からは、鉄製冑の小札200個が、もう一方の副室からは銅鏃106点、鉄鏃31点、鉄剣・鉄刀片８点、鉄斧１点、鑿１点、筒形銅器１点、紡錘車形石製品６点等といった副葬品が出土している。この妙見山古墳は、古墳時代前期の大型古墳が営まれ続けた向日丘陵の中では、最後にして最大の前方後円墳である。

また、桂川の上流域に位置する船井郡園部町の園部垣内古墳(注14)は、４世紀後半代の前方後円墳で、埋葬主体部となる粘土槨の東端に短刀や短剣を41本埋納した木製盒と推定される容器が埋め込まれていた。垣内古墳の粘土槨西端部では、土取りに際して銅鏡３面と農工具類がまとまって掘り出されていることから、この西端部にも木製盒が存在した可能性が高い。以上の２古墳が、現状では、この地域における前期古墳における副葬施設を有する古墳の例と言えるものである。

## 4．まとめにかえて

恵解山古墳と西墓山古墳を中心にして鉄器埋納施設について簡単に触れてきたが、両古墳の埋納施設に共通する点として、これだけ大量の鉄器を入れた長大な箱を墳頂に持ち運ぶのは、非現実的であるように思われることから、この木箱は、現地で組み立てられた可能性が強いことがあげられる。このことは、整然と並べられた鉄器の出土状態からも裏付けられるように思える。他の鉄器大量埋納施設を有する古墳の例を見ても、古墳上で埋納する鉄器の形状や量に合わせて組み立てられ、その場で納められていったと見るのが妥当と思われる。その場合、現地で組み上げるとすると、その場で、鉄器を埋置する行為をひとつの儀式として、葬送儀礼の一環に加えて行くことは容易に想像できる。古墳時代中期における、こうした多量の鉄器を別施設に埋納するという行為は、葬送儀礼の中に加わった新たな儀式と考えられ、遺骸を手厚く埋葬するという行為とは異なった方法で、比較的簡易な施設であっても、被葬者に対する威儀をさらに高揚させるものになると思われる。その儀式に在地の王たちにも参加させるとしたら、大王家の威信を示す大量の鉄器、それも鉄刀や剣、甲冑といった武器・武具を見せつけながらの儀式であるとすると相当な圧力を掛けることになるものと想像される。

大王系譜に属する地域に見られる、埋葬主体部とは別に容器等の施設を設けて多量の鉄器を中心とする副葬品を納める形態は、現在までのところ、恵解山古墳周辺を含む山城地域における古墳時代中期においては、独自に大きく変革するという状況は認められない。このような点から、恵解山古墳の鉄器埋納施設を考えると、やはり、これほど大量の武器を一気に埋納してしまうという行為は、大王家につながる河内地域からの影響によって飛躍すると考えるのが妥当なようであり、恵解山古墳は陪塚を持たない中小の古墳であっても、まさしくこれら大王家の方法を忠実にまねたミニ版の姿であると言える。墳形については大山古墳（伝仁徳陵古墳）と同形態をとり、古墳の立地も淀川を媒体として山城の口を押さえ、川からも乙訓地方の中心からも遠望できる地点を選んだ効果的な配置となっている。この恵解山古墳の被葬者を想像した場合、都出比呂志氏の指摘のように山城盆地の口を押さえ、淀川を経由して河内地方とつながる、河内大王家と手を結んだ乙訓の王、もしくは、直接大王家とつながった新たな乙訓・山城地域の王といった姿が浮かび上がってくるようである。

ところで、副葬品埋納施設の変遷という観点からは、上記の向日市妙見山古墳や園部垣内古墳といった前期古墳に見られる埋納施設については、あくまでも被葬者に付随する副葬品を埋葬主体部に添えて納めるためのものであり、埋葬儀礼の一環としては死者を埋葬する儀式の中で完結する段階のものと考えられる。このことは、先述の大和のメスリ山古

墳や新沢500号墳における埋葬方法でも共通することであるが、この2古墳の例が他と大きく異なる点は、大量の埋納鉄器を納める容器を埋葬主体とは切り離した別の施設として構築していることである。古墳時代中期になって、河内大王家の中心となる古市・百舌鳥古墳群の地域において、突然登場するように思われる、陪塚を典型とする埋葬主体とは全く切り離した施設に大量の鉄製品を埋納するという形態の初源といえるものが、大和大王家の前期古墳中において認められることは、こうした副葬品大量埋納施設を大王家の権威の発揚という発想で捉える場合、両地域の大王家に連続した古墳築造の論理が存在するように感じられる。各地域を代表するような古墳における葬送儀礼の変化といったものは、常に大王家の動向に影響されるものと思われる。それだけに、一見、特殊な位置付けをされそうな恵解山古墳に見られる鉄器埋納施設についても、それ以前の乙訓・山城地域における古墳の状況との綿密な比較が必要になってくる。今後とも、上記のような点に注意を払いながら、更に検討を加えて行きたい。

（くぼ・てつまさ＝当センター調査第2課主幹調査第2係長事務取扱）

注1　梅原末治「恵解山古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊　京都府)　1925

注2　a．三上貞二「恵解山古墳周濠第1次調査概報」(『長岡京市文化財調査報告書』第2冊　長岡京市教育委員会)　1976

b．三上貞二「恵解山古墳周濠第2次調査概報」(『長岡京市文化財調査報告書』第3冊　長岡京市教育委員会)　1977

注3　a．山本輝雄他「恵解山古墳第3次発掘調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第8冊　長岡京市教育委員会)　1981

b．山本輝雄「史跡恵解山古墳」(『長岡京市文化財調査報告書』第25冊　長岡京市教育委員会)　1990　ほか

注4　都出比呂志「五世紀における古墳の様相」(『向日市史』上巻　向日市史編さん委員会)　1983

注5　a．山田幸弘「西墓山古墳の調査」(『石川流域遺跡群発掘調査報告　』藤井寺市教育委員会)　1990

b．『新版　古市古墳群　－藤井寺市の遺跡ガイドブック　6－』(藤井寺市教育委員会)　1993

c．山田幸弘「鉄器大量埋納の謎－西墓山古墳のかたるもの－」(『倭の五王の時代－巨大古墳の謎にせまる－』ふじいでらカルチャーフォーラム 資料集　藤井寺市教育委員会)　1994

注6　北野耕平「第5章　野中アリ山古墳」(『河内における古墳の調査』(『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第1冊)　大阪大学文学部国史研究室)　1964

注7　北野耕平『河内野中古墳の研究』(『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第2冊　大阪大学文学部国史研究室)　1976

注8　末永雅雄・森　浩一『河内黒姫山古墳の研究』(大阪府教育委員会)　1953

注9　森　浩一「古市・百舌鳥古墳群と古墳中期の文化」(『大阪府史』第1巻　大阪府史編集専門委員会)　1978

注10　末永雅雄「宇和奈邊陵墓参考地陪塚高塚　大和第6号墳(円形墳)」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第4冊　奈良県)　1950

注11　伊達宗泰編『メスリ山古墳』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第35冊　奈良県立橿原考古学研究所)　1977

注12　伊達宗泰他『新沢千塚古墳群』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊　奈良県立橿原考古学研究所)　1981

注13　都出比呂志「前方後円墳の出現」(『向日市史』上巻　向日市史編さん委員会)　1983

注14　森　浩一編『園部垣内古墳』(『同志社大学文学部考古学調査報告』第6冊　同志社大学文学部文化学科)　1990